

ついでに一言、AUの新聞も、そうである。AUの新聞こそが未来を内蔵するもので、確かに芸術新潮、美術手帖、アトリエ等が勿論立派な美術雑誌なのである。それは否定する必要はない。しかし、そのAUが10年の歳月は、生産者である前衛作家たち、世界の仲間たちには、どの商業的美術雑誌より信頼されていることを知らなければ、我々がこうして自分自身を知り、自分自身の世界を創造することの意味が薄くなる。やはり根本は自分の手にしっかりと握られたものをまず信頼し、発展させていくよりほかに、別の道はない。その本筋において嶋本先生は確実な道を、自分自身だけでなく多くの人々に、日本・世界各国にて解放しているということの意味はきわめて大きい。いつも私が感心し尊敬できるのは、閉じて人々を困らせるとか、イジ悪い道具だてがいきい嶋本先生には無いことである。私、桜井にはそれが山ほどある。嶋本先生の場合、いつも聞きの方角性を持っている。死の方ではなく生のであり嫌でなく喜びであり、悲でなく楽であり、陰でなく陽である。それ等らは回帰するもので結局は同じものかも知れないが、嶋本先生は、それを天才的な力で止揚している唯一の芸術家である。なんとも不思議な存在であろう。まずは、その思想が不思議にも目大なのである。

実感として経済摩擦の成果として、日本の背景研究の一環としての文化に対する興味は確かに全世界に起っている。そして欧米は、とくに欧州は旧植民地のツケといおうか、イスラエル建国のユガミといおうか、日本人では到底判り得ない複雑な状況の中にあつて、日本では考えられないテロのアラシに見舞われている。だからといって、いきよに欧米諸国が崩壊するということは早計で、これほどの殿堂は、文化的に見るかぎり永遠の相貌を呈してそびえ立っている。その中にあつてオザワ、山海塾、それに名古屋の岩田、原先生たちがやっている「ロック歌舞伎」など日本人がボツボツ活躍しているのは、その前兆であるかもしれない。画家の方でも吉村、クドウ・シノハラ・アラカワ・カワハラ・菊畑・オチと続々いるが、輸出輸入という話は聞いたことはない。それにもかかわらず日本の市場は全世界の熱い視線の的である。現在、世界で唯一売れるところは日本だという。残念ながら日本人作家ではなく、すでに世界的に名のうれた作家、強力画商の売り込む新人達であるが、パリ在住の各国作家の殆どは、日本で展覧会を開くことを夢見ている情況である。誰に逢っても、「日本で展覧会を開くことが出来ないか」と聞いてくる。日本市場は日本人作家にきわめて狭くキビシイ特殊な市場なのである。なにしろ絵はロクロク見えないし、すでに世界的に評価のある有名作家、決して損をしない名画でなければ素人が見てもすぐ判るパリ風景とくる。それも悪いとはいわないが、程度が低いから、日本人作家の活発な発展を望むわけにはゆかない。そのような事情のきわめてキビシイ情況がそこにある。いまさら、作家を生み出す条件を書く勇気もない。最初は色々と考えたが、結局というよりアキラメざるを得ない今日である。そしてまたしようがないからまた考えはじめるといった悪循環の季節である。作家育成に対する考慮は全くないにもかかわらず、確実に肥大していく日本経済の黒字のリアクションは、いやいやながらも、もう一つの日本文化を生む母体にならざるを得ない。奇妙キテレッツ景観を呈してきているのである。